

「しまったー！」

始業式が終わり、又先生の話がようやく終わって放課後になる。淳と雄二は麗佳たちと夏休みの話をしていた。そんな中、雄二は彼にとってとても大切なことを夏休み中にやっていなかったことに気がつき、叫んでしまった。

「ど、どうしたの、雄二」

この声にクラス中の人間は雄二に目を向けた。当然間近で聞いた淳も驚いていた。

「おい、淳。俺たち大変なことを今までほっぽってきてしまった」

「た、大変なこと？ それって夏休みにやらなきゃいけないことだよねえ？ 宿題はもう提出したし、能力のしゅぎよ…
…、あ、いや合気道の練習もしっかりやったし………」

「へえ。貴方たち合気道をやっているだ」

「う、うん。そうなんだ。高校に入って何かやろうかなって思ってたときに慎先生が教えてくれたんだ」

口が滑った淳はあわててごまかす。この夏休みの間で、二人以外の人と話しているときに能力についてのことを話す

とき、合気道をやっているとごまかすことにしたのだ。だがもともと嘘をつくのがうまくない、どころかかなり下手な淳があわてて取り繕ったため、そんな言葉を咲は信じている様子ではなかった。

「と、とにかく。なんだい？ やり忘れたことって」

「決まってるだろ！ 夏祭りだよ、夏祭り」

「は？ 夏祭り？」

淳は予想だにしていなかった言葉にぽかんと口を開ける。雄二の口ぶりからもっと大切なことをし忘れていたのかと思っていたからだ。だが雄二にとってはそれはとても大切なことで、「おいおい、夏祭りといったら女子との距離をぐつとちぢめる絶好の機会じゃないか」とため息をつく。咲はくすくすと笑いながら「あら、雄二君にはぐつと距離を縮めた女の子がいたんだ」と反応する。その言葉に雄二はキラッと格好つけながら「なんなら、咲さんでも」と決めたが、しかし「残念ね。私は貴方よりも淳君のほうがいいわ」とのれんにうでおし、まるで取り合おうとはしなかった。だがこの一言に麗佳はあわててしまい、「さ、咲ちゃん」とあたふた

し始めたが、「安心してよ、麗佳。どちらかといえばよ、どちらかといえば」とまったくすすくと笑った。

と、そこへ「だったらいい話があるわよん」と右手の人差し指を立てたもなみがもったいぶりつつ、「なんと学校の近くの二子玉川の花火大会が開催されるのだ」と皆に教えた。もなみの「そしてなんと、それが開催されるのは次の土曜日なのです！」と続けた言葉に「まじかよ！」と雄二は驚きをあらわにする。

「あれ、でも二子玉の花火大会っていつも8月の終わりに開催されてなかったっけ？」

淳は子供のころ何度か雄二の家と一緒に二子玉川の花火大会に行ったことを思い出す。雄二もすぐに思い出したのか、「そういやそうだぜ」と淳の言葉に同意した。しかしもなみは「ふっふっふ」とまたもやもったいぶりながら「君たちは知らないのかね？　今年は9月の頭にやることになっているのだよ」といった。

「へえ、そうなのか。しらなかつたぜ」

「うん。でもなんでまた」

「そこまではあたしも知らないよ」

「でもいいわね、花火」

咲はうん、と大きくうなずくと「よし、じゃあ今度の土曜日はみんなで行きましょう」と提案した。これに反対の意を唱えるものは一人もおらず、皆「おう」とうなずいた。

『あ、慎。もう授業は終わってる？』

職員室に着いた途端になった携帯電話に、「なんだよ」としかめ面をしながら慎はポケットからとりだした。表示されていた名前からおおよその内容が想像できた慎は「もしもし」と通話ボタンを押した。するといつもどおり元気よく話しかけてくる相手に対し「おう、終わったぜい」と子トラも元気よく返した。

「もつとも、4時から職員会議だけどね」

『あ、そう。じゃあもうちよっと話せるわね』

「まあそうだけどな。んで、なんだ？ 最近はあるまりなかつたけど」

『そう、最近はあるがまだ働き始めて間もなかったからかわいそうだと思ってあえて手を出さないであげたのよ』

「おいおい、嘘つくなよ。仕事を始めて間もないからなれてなくて、それで時間がなかなか取れなかったんだろ、そっちが」

『な、そんなわけないじゃない。第一、私がそんなやわじやないって事くらいあなたも知っているじゃない』

「はいはい、そうですね。んで、なんだ、用件は？」

『ふっふっふ。勝負よ、赤羽慎』

(ああ、やっぱり)

勝負という言葉に予想が的中した慎はいつもどおり「俺に勝てると思ってるのかよ」と定型句を並べる。相手も同様に「そうやっていられるのも今のうちよ」と予定調和な返し文句をつないだ。慎はこれに対してくすりと笑い、「んで、内容は？」と質問する。

『明日の花火大会、そこで勝負よ』

「花火大会って二子玉の？」

『そうよ。何か問題でも？』

「いや、別に。ただ俺はお前も知つてのとおり武蔵広の教師だからな。見回りもしなきゃいけないらしい。それも品柄でいいならいいぞ」

『いいわ。でもよかったわね。明日は負けても見回りに頭をとられて足元がすくわれたとかいいわけにもなるでしょうね』

「はっ、返り討ちにしてやるよ」

慎は「望むところよ」と相手がやはりいつもどおりの言葉を返したところでまたもくすりと笑った。

職員会議は明日の二子玉の花火大会の見回りについてだった。慎は頬杖を立てながら聞き、メモを取る。「それじゃあ当日は皆よろしくお願いします」と教頭が終わりを告げると慎はメモをかばんに入れ、すぐに帰り支度を始める。すると体育教師で2年を担任にもつ姫川篤樹先生が「赤羽先生」と慎の机の前に立つのに気づいた。姫川は慎たちより少し上で、その整った顔立ちや漂わせている若さから女子から人気

の先生の一人であった。慎は気さくに「なんですか？ 姫川先生」とにこやかに答えたが、一方の姫川は「明日の件ですが」と慎をにらみつけた。

「明日の件、と言うと今しがた話していた二子玉の花火大会のことです？」

「ええ、そうです。そこで多少なら露店を利用してもいいとの事でしたね？」

「ええ、見回りを忘れない程度には、ですが」

「だから、明日決闘しましょう」

「けつとう？」

慎はすぐに職員会議の前の電話のやり取りを思い出す。それについておちよくってきているのかとも思ったが、姫川の出す雰囲気から察するにどうもそうではなさそうだと判断し、「どういうことでしょうか？」と聞く。姫川はちらりと白石春菜のほうを視線を向け、すぐにもどす。

「決闘、です。勝負の方法は任せます。私としてはスポーツで決闘してもいいのですが、それではあまりに私に有利すぎる。だからゲームにて決着をつけようというのです。そして

明日のお祭りは悪くない機会」

姫川はもう譲る気はないのだろう、と彼の目をみて思った。慎は「でも何でまた急に」と聞いた。姫川は「男と男のプライドをかけた戦いです。理由が必要ですか？」と返したが、慎は答えになってないため息をついた。

「ともかく。明日、待ってますからね」

姫川はその言葉を残して職員室を後にする。慎は呆然となり、しかしあつけにとられたのは一瞬だけですぐに「あ、いや明日は」と約束できない旨を伝えようとするが、そのときにはもう姫川はいなかった。

「大変なことになったね」

隣の机から優希が語りかけてくる。慎は「うるせえよ、野次馬」と二条にいやなやつのような言い方で言うともたため息を出すのだった。

「みんな、遅いね」

「うん」

花火大会当日。淳は待ち合わせの場所に10分前に到着した。そこには麗佳が一人いるだけで、他の人はまだ来ていなかった。淳はいつもどおりの格好で着ていたが、一方の麗佳は浴衣で着ており、淳は一目見た瞬間に目を奪われてしまった。ぽかんと口を開けていると「あ、淳君。こ、こんにちは」と麗佳に声をかけられたのであわてて「あ、うん。こんにちは、麗佳ちゃん」と取り繕ったがその顔はりんごよりも赤く、恥ずかしさのあまりすぐに顔をそらしてしまった。麗佳も麗佳でなんだか気恥ずかしくなってきたらしく、うつむいてしまった。

二人は15分ほどその場で目を合わせず、顔を赤くしながら皆を待っていたが、しかし一人としてくる気配はなかった。

「もう、5分も過ぎているのに、誰も来ないね。咲ちゃんは時間にも厳しい人だから遅れるのは珍しいんだけど……」

「あ、やっぱり咲さんは普段から時間とかはしっかり守る人なんだ」

「うん。でももなみちゃんはよく遅刻するからそのたびにいつも咲ちゃんに起こられるの」

「ハハハ。あの二人らしいね」

ピリリリリ

二人で話していると淳のポケットから着信音が流れた。そこには『谷本雄二』の名前が表示されており、淳はすぐに出た。

『おう、淳』

「やあ、雄二。時間、もうとつくに過ぎているんだけど。いつも君、時間にルーズな男はもてないって言ってなかったっけ？」

『悪い、淳。おれ、どうしてもはずせない用事ができちゃってさ』

「ふーん、そうか。でもだったらもっと早く連絡くれればよかったのに」

『ああ、悪かったよ。まあともかく、後は二人でごゆっくり』

「え？ 二人って？」

『あ、やべ。い、いやなんでもないよ。何でも。じゃ、じゃあな』

雄二の捨て台詞に淳は「あ、雄二」と言葉を投げかけるが、

そのときにはもう電話は切られており、スピーカーからは『ツーツー』と機会音がなるだけだった。

「あ、あの淳君」

「え？」

すると麗佳が申し訳なさそうに話しかけてくる。「あのね、怒らないで聞いてほしいんだけど」といいながら淳のほうに携帯のディスプレイをかざしながら。そこには『ゴメン、麗佳。風引いちやってこれなくなっちゃった。この埋め合わせはまたするから、今回は今いるメンバーで楽しんできて』という文が咲から送られてきたメールがあった。淳がみたことを確認すると「あ、あとね」と携帯を自分のところにもって行き、少し操作をしてまた淳のほうへ見せた。『ごめーん。用事あったの忘れてたわ。って、ことで今回はパスさせて。ま、あたしの分まで楽しんできてよ』ともなみからのメールだった。

「本当にゴメンね。せつかくみんなで楽しもうって言う企画だったのに」

「別に麗佳ちゃんが謝ることじゃないよ。それになんか雄二

もこれなくなつたみたいだし」

「え、雄二君も？」

「うん、そうなんだ」

淳がうなずくと麗佳は「そっか。じゃあ、どうしようか」と首を少しかしげて困った顔をした。

「やっと見つけたわよ、慎！」

二人が悩んでいると傍で元気のいい声が聞こえた。思わず二人はそちらを向くと、そこには慎と浴衣姿で左手を腰に当て、逆の手で慎をさす若い女性が立っていた。

「あ、早苗。おまえなんで携帯でないんだよ」

慎は女性に気がつくとき少し苛立ちを混ぜてそういった。しかし早苗と呼ばれた女性は「ふん。あんたみたいな暇人と違って私は午前中は仕事だったのよ。いちいち私事で携帯にでる時間なんてなかったわ」とふいと横を向いた。はあ、と一ため息をつき、「ああ、もういいや。ともかく、今日室はさあ……」と慎は彼の事情を早苗に説明しようとしたところで「ようやく見つけましたよ！ 赤羽先生！」と怒鳴り声が響いた。

「決闘の時間に送れずに来るとは結構な心がけです。さあ尋常に……」

「だれ、この人」

突如現れた姫川に対し、早苗は慎に聞く。慎が「いや、これはさあ」とどうしていいかを考えていると「な、なんだお前」と姫川は慎に対し「まさか赤羽先生！ 貴方は春菜さんという人がいながら……。しかも私との戦いにつれてくるなんて」と叫ぶ。この大声が周りの注目を集めているため、慎はたまったもんじゃなれないと思いつつ、「まあ、とりあえず落ち着いて」となだめかすが「ふざけるな！」と姫川は怒声を発した。傍でこのやり取りを見ていた早苗は「だから、あんた誰よ」といらいらしながら怒鳴る、とまではいかないレベルで姫川に声をかけるが、興奮している姫川は「君こそ誰だ！」と怒鳴った。これにはカチンと来たのか、早苗は「さつきからうるさいわね、あんた！ 質問しているのはこっちでしょ！ 私？ 私はコイツのライバルよ！」とこちらも声を荒げて言った。

「ライバル？ 女の癖に何がライバルか！ 赤羽先生は私

が倒すんだ！　そして、春菜さんと……」

「女の癖にですって！　いい度胸ね。慎の前にあんたを沈めてあげるわ！」

慎は二人を「ま、まあまあ」となだめようとするが、聞く耳を持ってもらえず、二人は互いを指差し「勝負だ！！」と宣戦布告した。

そのやり取りを見ながら淳ははずかしいやらなんやらで一刻もここを早く抜け去りたいと思い、「い、いこっか」と麗佳に声をかけた。

慎たちのやり取りの場から逃げ出すように出店のほうに向かい、そしていろいろな出店があるなあと眺めていると、麗佳がぽんぽんと肩をたたいた。

「みて、淳君。あの金魚の絵、可愛いね」

麗佳はとある一つの出店を指差す。そこに描いてあった金魚の絵は可愛いイラストタッチで描かれていた。

「うん、可愛いね」

淳は思ったままを口にする。すると麗佳は少しうつむいて

「あ、あの」と小さな声でつぶやいた。

「やってきてもいいかな？ 金魚すくい」

淳はまだ花火に時間もあるし、もともと花火までの時間に少し露店を回ろうと考えていたので、「うん。いいよ」とにこりと返事した。麗佳はぱつと笑顔を浮かべて「ありがとう」と礼を言う。そのときの麗佳があまりにも可愛く感じた淳は顔を赤らめ、「う、うん」とすこし変な声になって言った。自身の声が変わってしまったことが恥ずかしく、淳は顔をよりいつそう赤らめてしまったが、麗佳は気づいていなかったらしく、とてとてと露店のほうへ早足で言ってしまった。

「あ、あの、一回やらせてください」と麗佳は露店のおじさんにお金を渡す。淳はそんな麗佳のそばに歩いていき、様子を見守った。麗佳ははじめどの金魚がいいかなとプールの中の金魚をいろいろ見ていたが、一匹の金魚を見つけ「あ、あの金魚。昔飼っていたポチに似てる」と淳のほうを向いて言った。

「ポチって、犬？」

「ううん、昔お父さんと一緒にお祭りにいったときにとつてもらった金魚。ポチって一つだけ大きな点があるからポチって名前なんだ」

麗佳は昔を振り返えるように少し遠くを眺めた。

「決めた。あの子にしよう」

麗佳は浴衣のすそを少しまくり、狙いの金魚が近くに来るときを狙った。その瞬間はすぐに来て、麗佳はさっと金魚を掬おうとしたが、ポイとよばれる金魚を掬う道具の真ん中で掬おうとしたためか、金魚を乗せた瞬間、紙が破れてしまった。「あ、ああ」と麗佳は落ち込むが、「ほれ、お嬢ちゃん。うちは三回までオーケーだよ」と店のおじさんは店の看板をさして、そしてもう二個ポイを渡してくれた。麗佳は「あ、あの一個持っていてください」と淳に一つポイを預けるとすぐに金魚のほうに目をやった。お目当ての金魚は今度は動き回っており、止まっても麗佳の近くには止まってくれず、なかなかいい位置に来なかった。痺れを切らした麗佳は自身から少し離れた位置で掬おうとするが結局紙が破れるだけだ

った。

三度目の挑戦もはかなく終わりを告げ、「ゴメンね、淳君。せつかく時間を割いてもらったのに」とうつむいた。そんな麗佳の様子を見て、淳は「おじさん、僕も一回やらせてください」とお金を渡した。店のおじさんは「ほらよ、がんばんな」とポイを三つくれ、淳は一つを手にとって残りを麗佳に預けた。

「じゅ、淳君」

「大丈夫、任せて」

淳は麗佳に大きくうなずいて見せると、狙いの金魚を凝視した。おそらく能力を使えばたやすいのだろう。だが淳はそんなないんちきのようなことはせず正々堂々と勝負したい、と考え使おうとはしなかった。それに淳には勝算があった。以前テレビで金魚すくいの骨を見たことがあったのだ。その骨とはポイの真ん中で金魚を掬おうとするとしてこの関係で紙に大きな力がかかってしまうから、なるべくポイの縁側で金魚を掬おうとすることだ。さらに今までの能力の修行で彼は動体視力や瞬発力、タイミングを見計らう技術をつけており、

ならばできるだろうと踏んだのだった。

結果は3戦3敗。一度目は惜しいところまでいったが、後の二回はてんでだめだった。はじめに意気込んでいたこともあり、淳は「ゴメンね、麗佳ちゃん」と申し訳なさそうにわびた。しかしうつむいている淳に対して「そ、そんな。仕方ないよ。で、でもありがとう。わざわざ私のために」と麗佳は明るく答えた。

「なーに、やってるんだい？」

そこに優希先生と縁先生がやってきた。ゆかり先生は隣のクラスの副担任の先生だ。確か今日は先生方は見回りに来るって言ってたな、と淳は思い出し、同時に慎のことも思い出す。慎先生はどうなったのだろう、と思ったときと同時にして、優希は「金魚すくいだね」と二人ににこりと笑って話しかけてきた。淳は「はい。でもなかなか取れなくて」とちらと麗佳のほうを向いて答えると「よーし、じゃあ僕もやってみようかな」とおじさんにお金を渡した。おじさんは「毎度！」と元気よくポイを渡し、優希は腕をまくってぺろりと

上唇を舌でなめる。そして威勢よくポイを水に沈めると……。紙が破けた。優希は「あら」と顔を傾げたが、縁はこの様子に噴出し、かなり楽しそうに笑った。「く、くそう」と優希はすぐに金魚に向き直った。だがその結果は先の二人と同じく結局一匹も掬えなかった。

笑いがようやく収まった縁は「はあ、はあ。面白かった」と息を整え、「それで、どの金魚がほしいの？」と麗佳に聞いた。麗佳はすぐに「あ、あの金魚です」と答え、縁の「他には？」との問いに首を振った。

「よし、じゃあおじさん。ポイを一個だけ頂戴」

この自信に満ち溢れた言葉におじさんは「ほう。いいのかいお姉さん」と笑いながらポイを一つだけ渡した。「だって私がポイを三つももらったら、ここの金魚はいなくなっちゃうでしょ」と縁は人差し指を立てて言うとともに真剣な顔立ちになり、金魚と向かい合う。麗佳は「あ、あの金魚、です」と縁に教え、その様子を見ていた優希は「ほんとうに一本でいいのかい、ゆかり。意外と難しいんだよ」と縁に言ったが、

「黙って」と縁は取り合おうとはしなかった。

一瞬

まさに一瞬の出来事だった。動き回っていた金魚が止まった瞬間に縁の手は動き、さつと目的の金魚をポイで掬って器に入れる。おじさんが「おお」と関心した瞬間、縁は右の人差し指でポイに穴を開けた。「あれ、もったいない」と優希は声をかけたが、「目的のものは手に入ったんだしいいのよ。欲張りすぎは身を滅ぼすわよ」と紙が破けたポイをおじさんに渡し、長い黒髪をなびかせながら「じゃあねー」と去っていった。優希は「あ、まってよー」とその背中を追っていく。その様子を見ていた二人はおじさんが「ほらよ」と縁が掬ってくれた金魚を袋に入れて渡してくるまでそちらをぼんやりと眺めていた。

「なんだ、お前ら。いきがってた割にはなさけないなあ」

結局三人で勝負することになり、慎たちは最初の戦いであ

る射的を始めた。早苗ははじめにやり、何度かかすらせはしたものの、射的を落とすまではいかなかった。続いて姫川の番であったが、こちらは早苗と違い一発もかすらなかった。その二人の様子を見て、三番手である慎は軽い簡単な獲物であるシガレットお菓子に弾を当て、見事に商品をゲットした。「ふん、せいぜいいきがつるといいわ。まだ勝負は始まったばかり。最後に笑うのは私よ」

早苗はそう強がりを言っていたが姫川は非常にいらだっていた。理由は簡単だ。別に自身が一発もかすらなかったからではない。途中で早苗の妨害があり、その結果として失敗したからだ。そして慎にも同様の妨害があり、しかし慎はいつもおおりであるためなれている。故に妨害工作をされていながらもしつかりと勝利を収めている。

だが。

納得がいかない。

姫川はそちらがそのつもりならば覚えていると心の中でつぶやき、「さあ、次の勝負は……」と言っている早苗をにらみつけた。

「あ！」

「あ……」

淳は縁にとってもらった金魚を左の手首からぶら下げている麗佳とともに露店を回っていた。最初の金魚すくい、次は焼き蕎麦屋さん。続いてわたあめ。わたあめを二人で一つ買い、ようやく食べ終わり水あめ屋にいかうとしたときに、クラスの男友達と露店を回っている雄二を淳は見つけた。

否、見つけてしまった。

「雄二、どうしてここに」

思わず淳は問いかける。確か彼は急用とやらでここにはこれなかったはずなのに。

問いかけられた雄二は「い、いや、これは」とあわあわし始める。すると見かねたクラスメートの一人が「ほら行くぞ、雄二」と雄二の襟を掴み、引っ張って行ってしまった。雄二が集団に合流すると、そのクラスメートはこちらに手を振り、「あとは二人で楽しみなー」と声をかけてきた。「いや、あ

の」と淳は声をかけたが、彼らはその声を無視していった。まいった。「どういうこと、でしょう？」と麗佳は淳のほうを向き疑問を口にするが、自身もよく分かっていない淳は「な、なんだったんだらうね」とよく分らないことを口にした。と、その時、麗佳は「あ！」と驚きの声をあげ、「淳君、淳君。あれ……」と左手で淳の服を軽く引っ張って麗佳の右側を指差した。

そこには顔持ちの暗い慎先生と、その後ろで姫川先生と早苗と呼ばれていた女性がにらみ合うというなんだかよく分からない状況な三人が歩いていた。「何があったんだらう」と麗佳はつぶやくが、答えを持ち合わせていない淳は「さあ」としか返事ができなかった。少しして慎は淳たちに気づき、「あ、お前たち」と駆け寄ってきた。

「助けてくれ。俺にはもう耐えるに耐えられん」

慎は切羽詰ったような声で淳たちに言った。思わず淳は「何があったんです？」と問う。すると慎は「実は……」と語り始めた。

「実はな、今日、そこにいる二人に勝負を挑まれてたんだよ」

「勝負を挑まれる？」

「ああ。早苗……、あ、その姉ちゃんのことな。早苗にはよく勝負を挑まれるからいいとして、姫川先生からも勝負を挑まれたんだよ」

「はあ」

「まあそんなことはいいんだ。ともかく、俺は二人に勝負を挑まれたんだ。いや、それはいい。結局三人で回るようになったんだから。そう、勝負をするってこと自体はいいんだ。べつにそれでよかったんだ」

「じゃあ、なにが問題なんですか？」

ここで慎は一つため息をつき、続ける。

「早苗がな、自分の有利になるように妨害を始めたんだ。いや、妨害自身はいいんだ。真剣勝負なんだから勝つためには手は選ばない。それは分かる。それにいつものことだしな。

問題はそれを姫川先生が知らなかったことなんだ。知らなかったが故に、一つ目の戦いで早苗の妨害工作をもろに喰らってしまったんだ。

そしてその後、二つ目の戦い出だ。それに怒こった姫川先生に、また早苗の妨害工作がクリンヒットしてしまった」

そのときのシーンをを想像し、軽く引いた淳は「うわあ」と顔を引きつらせた。

「そして第三戦目。ついに姫川先生の仕返しが始まる。といつてもこれがよくなかった。早苗がいくら妨害工作をやるつていっても、射的の最中に大声を出すとか水を少しかけてこっちの集中力をそいだりするくらいなんだ。でも怒りに燃えた姫川先生は手加減を忘れた。

さつきも言ったように、俺はいつも早苗から妨害工作を受けてるし、さすがに今日の雰囲気は悪そうだって認識したから周りに注意を張ってたおかげで何とか姫川先生の攻撃を避けられた。でも、早苗はまさか今まで何もしてこなかった姫川先生がここに来てそんな事をやるとは考えもしなかったんだろう。俺のほうばかりに集中して、しかし実際にダメージが来たのは姫から先生だったんだ」

そこまで聞いて麗佳もさすがに引いたのか、「なんだか、いやな戦いですね」とつぶやいた。

慎はもう一つため息をついて、「いつもはもつとさっぱりした戦いなんだけどな」としかめ面を一瞬だけ覗かせまたすぐに今ある状況がいやだいやだといわんばかりの表情に戻った。

「今日はよく分からんが早苗の機嫌がずっと悪かったり、姫川先生が早苗の攻撃をもろに喰らったり、姫川先生も姫川先生で我を忘れたりでひっちゃかめっちゃかなんだ。そして続く4戦目と5戦目。二人は互いに度を越えた妨害の数々を繰り広げたんだけだ」

「それからどうなったんです？」

「俺もこれはさすがにまずいと思ったね。今はまだ二人の勝利数が等しくゼロだったからまだ拮抗した半冷戦状態な雰囲気があったけど、どっちかにパワーバランスが傾いたらやばいって思って、何とか全部勝った」

「おお」

「そして今の状況ってわけだ」

淳は慎の後ろの様子を見やる。そこには互いに視線だけで相手を殺せそうなほどににらみ合う二人の様子が見受けら

れた。確かにこれは何かきつかけがあればすぐに何かが起きた。そうなる一触即発な様子で、淳も麗佳もこれはやばいと感じ取った。

「慎！ まだ？ ほら、とつとといくわよ」

「え、もう！？ ちょっとまった。休憩タイム……」

慎は必死に手をフルフルと振りいやいやいったが、しかし「もう十分休んだでしょ！ まだ後二戦残ってるわ！ 私はまだ一勝もしてないんだから、さっさといくわよ！」といつて連れ去られてしまった。

「次こそ私の本当の強さを見せてやるわ！」

「は。そんな負け犬のような言い方をするやつは始めてみただぜ」

「な、何ですって！ いいわ。言っただけいいわよ」

先ほどとは逆に口論をしながら先行く二人の後を慎は「もうやだ」ととぼとぼと着いていくのだった。

「あ！ 当たりました！ もう一個もらえます！」

「すごい、麗佳ちゃん。運がいいんだね」

「え、いや、そんな」

慎たちを見送った後、当初の予定だった水あめやに淳たちは向かった。先に麗佳が買ったが、そのお店では買う前に目の一つだけに丸のついたさいころを振り、見事その丸を出した麗佳はあたりでもう一つ水あめをもらえるようだった。

「淳君、選んでいいですよ」

「え？」

「私は一つで十分ですから、淳君に贈呈します」

「え、でも悪いよ」

淳は申し訳なさから断ろうとしたが、「でも、もうこれを食べたら私おなかいっぱいですし」と麗佳がつぶやいたため、お言葉に甘えることにした。

「ただ、割り勘にさせてもらえないかな？」

「割り勘、ですか？」

「うん。水あめ一つの値段で二つ買ったから、半分のお金は払うよ」

「そんな、気にしなくてもいいのに」

苦笑いする麗佳に、「でも、やっぱり申し訳ないからさ」と淳は言う。そんな淳に麗佳は「いつもお世話になってるお礼って事でどうかな」とにこりと笑った。

「それに、初めてであったときのお礼まだしてなかったし。あ、勿論、あの時はとつてもお世話になったし、こんなことくらいでは返せないって分かってるよ。だから、そうじゃなくって。うん、そう。だから少しずつ、こうやってお返しさせてもらえるとうれしいな」

麗佳のそんな笑った顔に「かわいいな」と心の中でつぶやいた淳はそんな自分を意識した瞬間に顔がぼっと赤くなる。そんな淳を知ってか知らずか、麗佳は少しくらい顔になって「でも、今の貴方は……」とつぶやく。麗佳が「やっぱり、言うべきなのかな」と思った瞬間、淳は「うん？ 何か言っただ？」と聞いてきて、はっと驚いた彼女は「ううん、なんでもない」とごまかすのだった。

ヒュー

ドン

空に色鮮やかな光り輝く花が咲き始めた。水あめを食べ終わり花火を見るのにいい位置を淳たちは探し始めたが、運よくすぐに見つけた。その場所は立見席で、少しつらいかなと淳は思ったが、しかしどこかに座ることによって麗佳の浴衣が汚れてしまうよりは良いかなと考えることにした。

「きれい」

「うん。そうだね」

そしていざ花火が始まるとそんな事はすっぱりと忘れ、その美しさに見とれた。

大きい花。

小さい花。

ドドドと連続で咲く花。

ヒューと長くなった後にパッと大きく輝く花。

大小だけでなく、本当にいろいろな顔を見せる暗闇に咲く花は神秘的で、そしてロマンチックでもあった。

「やっぱり花火は日本の心意気だな」

どこからか聞こえたそのセリフに、日本に生まれてよかったな、と同意する淳であった。

そんな淳たちから少し離れた位置で、そのような良い雰囲気
を台無しにする二人がいた。

「あ、あれは紅だからストロンチウムだな」

「あれは黄色だからナトリウムね」

姫川と勝負の後に分かれ、慎と早苗の二人は花火を見ることにした。最初こそ黙って観賞していたものの、慎がぼろっと「紫はリチウムだ」といったため、慎と早苗は花火の色から元素当てを始めていた。完全に周りのムードをぶち壊している。周りの目が非常に冷たい。だが本人たちはそういいながらも心ではしっかりと花火を観賞しているのだからたちが悪いかもしれない。

結局6戦目のゲームも何とか慎が勝利を収めた。しかしこ

れにより、早苗と姫川は最後の勝負に躍起になった。ここで負ければ完全敗北となってしまうからだ。そしてここでもしもどちらかが一勝してしまった場合、もうパワーバランスが元に戻ることはなくなってしまうと危惧した慎もまた、絶対に負けることはできないと意気込んで勝負を迎えた。

結果は慎の勝利であった。しかし、ある意味でこれがまずかった。姫川も早苗も、この結果感情の捌け口が慎に向いてしまったのだ。

「何であんたが全勝してんのよ!」

「え?」

「そうだ。それに君は俺たちが堂々と戦っているのにこそこそと隠れながら汚く勝利を拾ってるだけじゃないか」

「え、え?」

二人に追い詰められ、慎は後ずさる。だが二人はそんな慎を決して逃がしはしなかった。

「篤樹! 次の戦い、一時休戦としましよ!」

早苗は慎を捕まえたまま、顔を姫川に向ける。姫川も了承

し、「ああ。そうだな。このやろうに目にもものを見せてやろう」と大きくうなずいた。

「え、でももう7戦全部終わった……」

「よし、じゃああの金魚すくいでラストバトルよ！」

「おう。見ている赤羽先生！」

「いや、ちよっと聞けよお前ら」

そして慎は二対一という状況下に陥り、敗北した。

「はー、清々した」

早苗は大きく伸びをし、「それにしてもあんた、なかなかやるわね」と姫川を褒め称えた。

「これくらいどうってことないさ」

二人はその後大きく握手を交した。そんな二人の様子を見て「ま、いいか。仲直りできたならさ」と慎はつぶやき、苦笑するのだった。

「綺麗、だったね」

「うん、本当に」

花火が終わり、二人は岐路に着く。周りに人かあまりにも多くて離れ離れにならないように注意しながら。

「ねえ、淳君。聞いてもいいかな」

聞くか聞かぬか、ずっと悩んでおり、ようやく麗佳は踏ん切りがついたため、淳に問おうとする。

「ん？ なあに、麗佳ちゃん」

「こんなことを言ったら失礼かもしれないから最初に謝っておきます。それにひよっとしたら私の勘違いかも知れないし……」

麗佳はしばらくうつむく。そしてうんとうなずくと淳の目をしっかりと見つけて言った。

「貴方はそんなに、何におびえているのですか？」

「何におびえている、か」

学校に着いた淳は一昨日の夜に麗佳に言われたことを思い出す。

『貴方はそんなに、何におびえているのですか？』

そのセリフを言った後、麗佳はすぐに「あ、こんなことを言っでごめんなさい」と謝ってきた。実感のわからないその言葉に許すも許さないもなく、ただその謝罪を「べ、別に気にしてないから大丈夫だよ」と受け入れるしか淳にはなく、ただ一方ですきりと心が痛むのを感じていた。

「僕は、何かに恐れているんだろうか？」

そんな実感はやはりない。しかし、他者から見てそんな実感を感じさせるような振る舞いを淳はしていたのだろう。しかし、一体何時からだろうか。淳はそのことを聞いておけばよかったといまさらながらに悔やむ。

「ふう」

一息つき、淳は一昨日の夜から何度も何度も考えていたことを再考し始める。

何かを恐れるような事件は今までになかったわけではない。それは主に高校に入ってからのことだから、可能性は絞

られてくる。

高校受験にあった麗佳を助けたあの出来事。

雄二が能力に目覚め、慎先生も能力者だと知ったあの出来事。

気高き純白、白藤聡介とのあの一件。

そして覚えていないけれども、あつたらしい誘拐事件。

可能性が高いのは白藤との戦いだろう。

「白藤さんは確かに強かった。だから恐れるに値するのだから。」

でも。

でも僕はあの時、恐怖をそこまで感じてはいなかった。それ以上に、やってやるという気持ちのほうが強かったはずだ。

そうだ。

あのとき負けたことを何度も思っ僕は修行してきたんだ。もうあんなことは絶対にいやだから。

そうだよ。

僕は何度もあのときを振り返ったはずだ。そしてそのときに恐怖を感じたことはなかったはず……」

淳は心の中で今まで何度も何度も白藤との戦いを思い出したことを思い出す。そしてそのときに恐怖など感じていなかったことも。

だからこそこれは関係ない、と割り切りそうになる。しかし、一応、ということでは白藤との戦いを改めて反復すると、背筋を冷たく駆け抜ける風を感じたかのような恐怖に身震いした。

「なんで」

なぜ。

なぜ今まで一度も感じなかった恐怖をいまさら感じたのか。確かにこれを思い出すのは久しぶりだ。この戦いを振り返って復習したのは大体あの事件があつて一月のあいだだけだった。しかしその間に自身の悪かった点を復習しつくしたといつてもいいくらいには反復して思い返した。そのときには一度たりとも、ここまでの恐怖を感じたことはなかったはずなのに。

じゃあやっぱり、白藤さんとの一件が原因なのか。

そこまで淳が考えたとき、勢いよく扉が開き、雄二が入っ

てきた。

「お、淳。おはよう」

「あ、雄二！」

雄二を見た瞬間、今まで考えていたことなんてすっかり忘れて、淳は一昨日のことを問い詰め始める」

「花火大会の日！ 何で君がいたんだよ！」

「あ、えーと、それはだな」

聞かれた瞬間に目をそらした雄二に淳は疑いのまなざしを向け続ける。

「雄二！」

淳は尚も雄二を問い詰めようとする。

「いや、だからな」

「だから何？」

雄二が目をそらすのも限界だと感じ、思わずポロリと本音を吐きそうになるのをぐっところさえ、「いや、そんなことよ
りさあ」と話をそらそうとする。だが、一向に淳のにらみは
続いた。

「おはよう、お二人さん。あ、淳君花火大会どうだった？」
そこへいつもは遅刻ぎりぎりのもなみが珍しくやってきた。まだ朝の会が始まる15分前だからかなり珍しい。

雄二はもなみが淳に話しかけた好きに自分の席に逃げる。
淳は「あ、雄二！」と当然これを追おうとするが、しかしもなみが「まあまあ。それで、どうだったの？」と淳をいかせてくれなかった。

結局もなみに花火大会で麗佳と過ごしたことの内容をこつてりと聞き出され、後から加わった咲と麗佳とともに朝の時間は過ごした。